

花育の理念をもう一度考える

～今後の花育に活かすために～

2009.8.25.



花育の基本理念(要旨)

おもに日常の生活空間に、ふさわしい花や緑を取り入れ、幼児・児童が花や緑のある快さを身近に感じることでできる環境を整え、幼児・児童1人1人が花や緑のある快適環境の創造に参加しようとする姿勢を育み、健全かつ多様で豊かな心身を育成する教育活動
なおこの「花育」の推進には、平成2年大阪開催花博のテーマとされた現代人の課題である「自然と人間の共生」と生態系等への配慮としての「自然破壊を回避し、健全な状態に保全すること」がこの理念に含まれるものとする

(花育活動推進委員会)

花育基本理念の前半

①(幼児・児童が)花や緑のある快さを身近に感じることで
できる環境を整える

②(幼児・児童)花や緑のある快適環境の創造に参加しよう
とする姿勢を育む

花育は①②からスタートする

実習の前に花や緑に親しむ機会をできるだけ多く持つ

例:身近な花や緑の様子や変化などを繰り返し観察する

花や緑を世話をする作業、飾る作業などを見学する

花や緑の名前を知る、花の話聞く 等々

花育は将来花緑に親しむことのできる素地を作るのが
主な目的

花育基本理念の後半

①自然と人間の共生

②自然破壊を回避し、健全な状態に保全する

花育の内容すべてが原則的にこの①②に反するものであってはならない

花育実施・指導者は①②に反することのないように

最大限の努力・工夫をする必要がある

命を扱う花育を通して生命の意味や大切さを伝える細心の注意必要、芽が出ない、花が咲かない等うまく扱えなかったときの心のケアも十分に

種子をまくときに幼児・児童問うてみよう

「種子の住み心地は良いかな」

「最後まで世話をすることができるかな」

自然と共生の語の解釈

花育では自然、共生をどのような範囲とみるか

自然の分類？

* 人間の手がかわっていない自然

大自然 一次自然

* 人間が手を加えた自然(?)

中自然 二次自然

小自然

共生とは支え合う関係

ふつう片方のみが利益を得る関係は指さない

→花育では少なくとも生態系の破壊を回避する方向の
共生を基本とする必要あり

使用する植物の検討等(環境・生態系への負荷他)

花育の必要性

古い時代 花と緑(=植物)と祖先たちは

必然的に共生する密な関係

現在 花と緑との密な関係はほぼ失われた

→花育の必要性浮上？

花育以前の問題として都市や屋内という「究極の大不自然」の中における花や緑と人とのかかわりは歴史的にみても、まだ端緒についたばかり

→その健全なあり方、望ましいあり方ははっきりと見えてはいない

→データの集積や花育を実践する中からそれぞれの地域(人と自然)にふさわしい花育のあり方を考え、作り上げることが必要である

花育の目的

花や緑の持つ機能(花育推進方策に記載)を効果的に活用

- ①生活空間の花や緑を眺めたりふれたりする
→心身を癒す、リフレッシュさせる
- ②知識や体験を盛んに吸収する過程にある幼児・児童が花や緑に親しみ、育てることで、命の営みに触れる
→情操面の向上、体験活動の効果が期待できる
- ③花を介した世代間交流、地域活動
→地域とのつながりを深める
→人とのふれあいを身につける

花育の実施法による分類

① 全員参加型

幼稚園、学校等で実施するものの多く

大半の人々(とくに保護者)に受け入れられるかたちであることが必要

配慮しなければならない事項が多い

② 自由参加型

それぞれの目的、趣味、考え方等を持つ団体、事業者、個人がその趣旨に賛同して参加する園児、児童、親子等を募って実施するもの

配慮事項は比較的少なく内容に個性を加味するなど

「花育の理念」に反しないものであればO.K.

学校等で実施されるものであってもクラブ活動等で自主的に集まったグループは②に近い

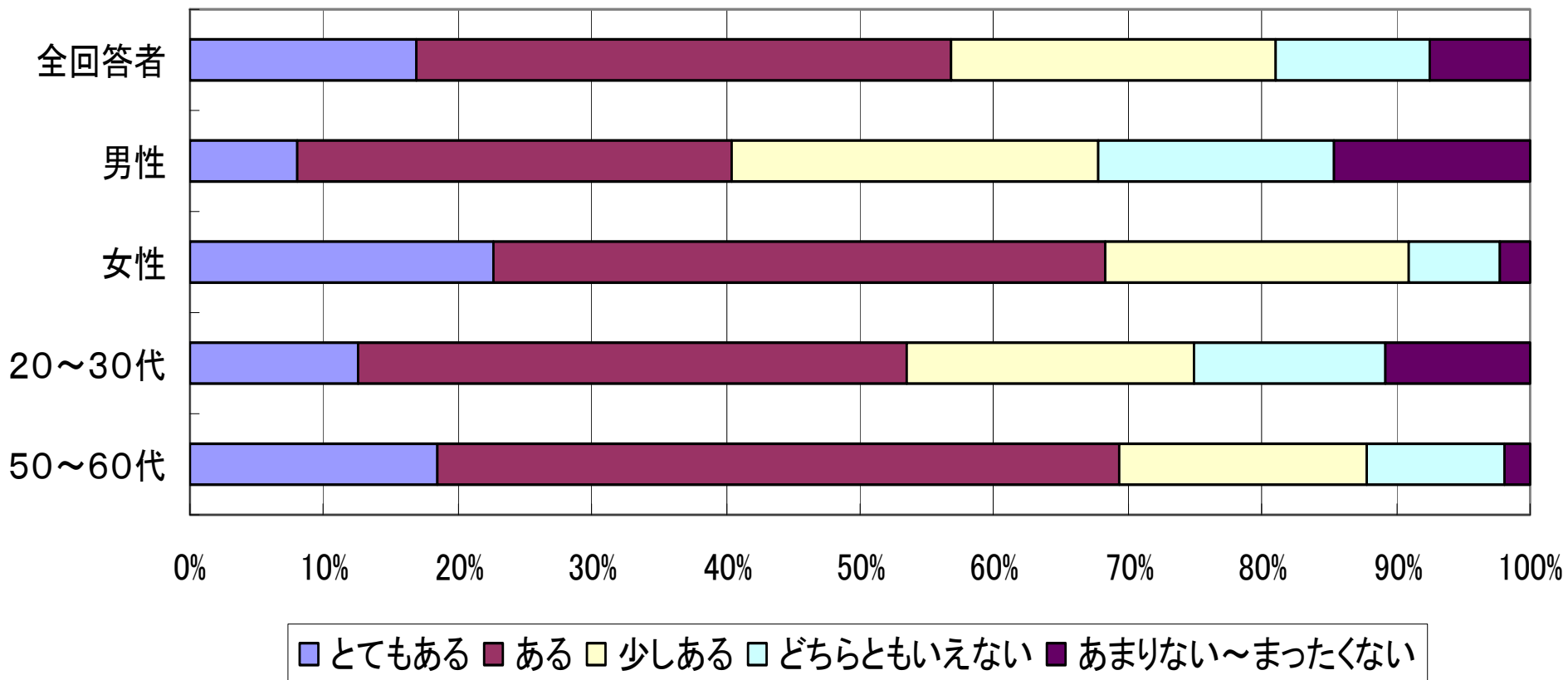


図 花全般への関心の度合い

実施:2000年, 対象:168名, 男性 64名, 女性 90名,
20~30代 57名, 50~60代 51名

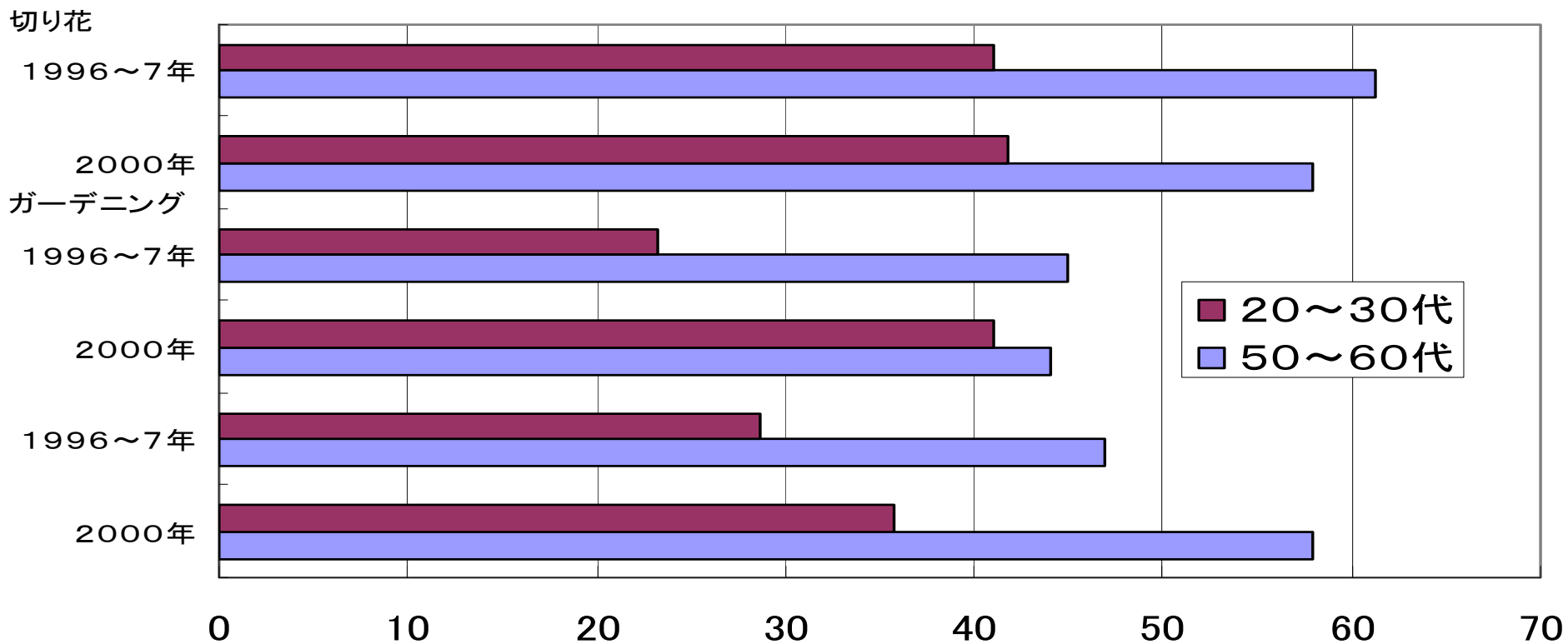
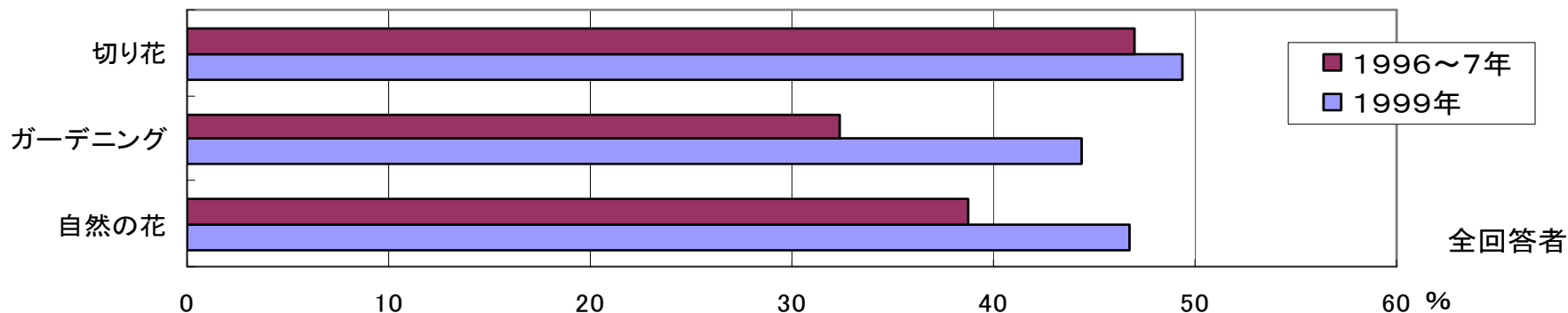


図 花の消費の縮小はどこから始まったのか

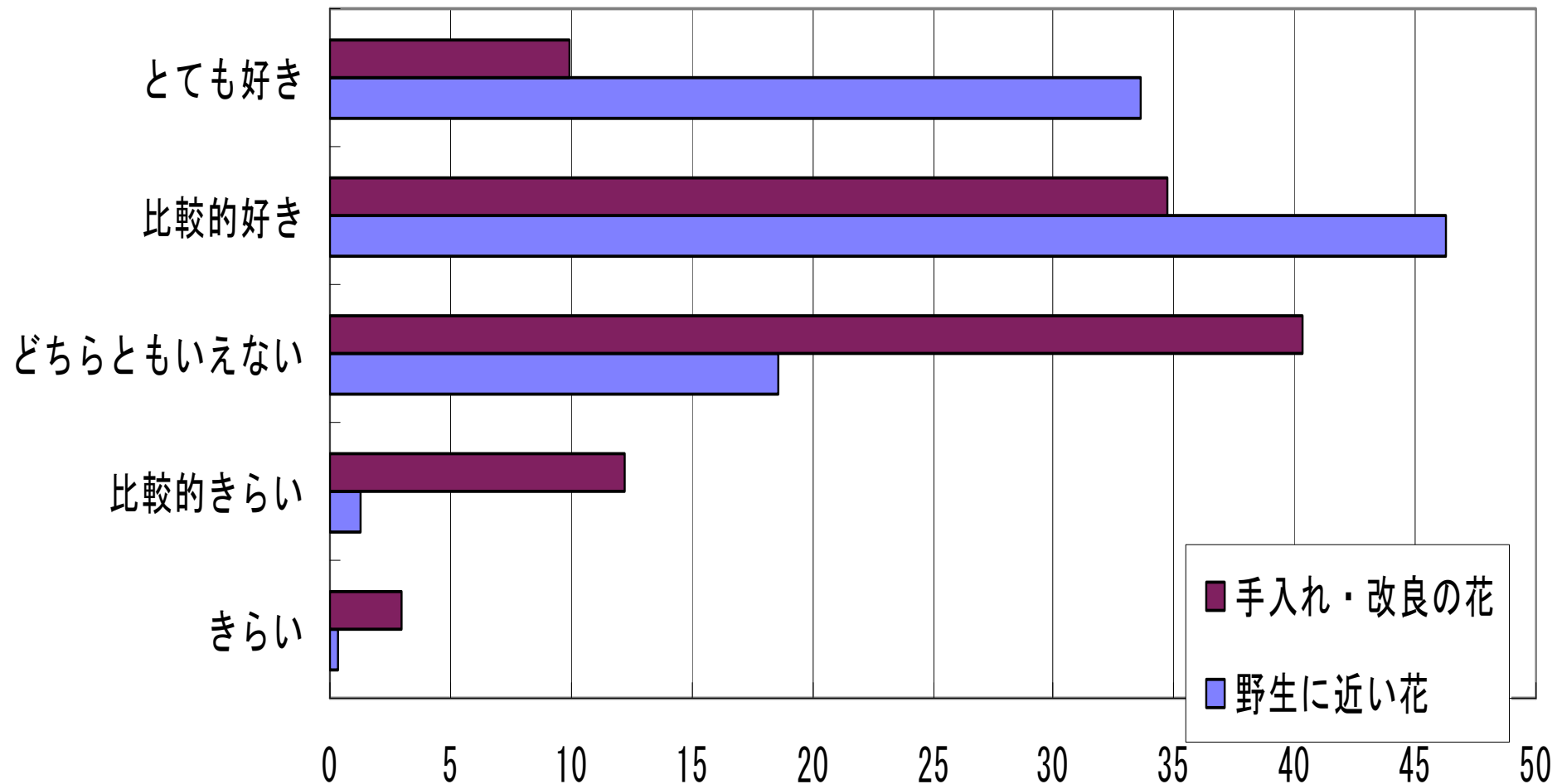


図 野生に近い花が好きか、手入れのよい改良された花が好きか

前画面のグラフから

「花は好きですか」に90%前後の人がYESと答える

「花の嫌いな人はいない」

といわれるのに「花が売れない」理由が見えてくる



現在の商品化された花を大半の消費者が好むとは限らない

社会的な自然志向化でこの傾向は強まりつつある？

都市生活者の多く

→品種改良された人工的な自然もどきは×

→現在は加速度的に本物の自然だけが◎ の情勢に

I 現代の日本人が好む花

花を美よりもやすらぎ、自然とイメージする人が多く、好まれる花の平均像は季節感のある、自然の野の雰囲気を持つ、他の花とは違う適度な特徴のある花、軽い感じの、薄い花びらと、折れそうに細くやや長い花首をもつ、白かごく淡い色の、小ぶりの花、やすらぎとやさしさと、やわらかさの感じられる花、すなわち「軽・薄・淡・小」の花、「3Y」の花となる

反対にあまり好まれない花は、一年中目にする季節感に欠ける花、元々のその花らしさが失われて、どれもがバラやダリアのようにはなやかで改良の進みすぎた感じの花、花びらが厚く、重い感じの、花首が短く太い花、濃い、派手な色の大きな花、野の花であっても、ありふれた花、粗野な感じのする花、「重・厚・濃・大」の花となるだろうか

Ⅱ「埋める」花の文化、「区切る」花の文化

欧米と日本の花の文化を比較して、欧米では時間的、距離的な隙間を埋めようとする「埋める」花の文化、日本では時間的な隙間、距離的な隙間の形や量、比率なども観賞の対象とする「区切る」あるいは「間」の花の文化であると位置づけることはできないだろうか、この違いは自然環境によるところが大きいと思われる、欧米の空間は不毛で、乾いていて本当になにもないことを示し「空間恐怖」ということばが生まれる世界である、一方日本の空間は生命を育む湿り気のある豊かなものとしてイメージされる、感動を生む花の「季節感」や一重の花、小さな花に奥ゆかしさを添え、余情あふれるものにするのに不可欠の役割を果たすのは、墨絵、俳句等にも共通する「間」、「余白」であるといってよいだろう

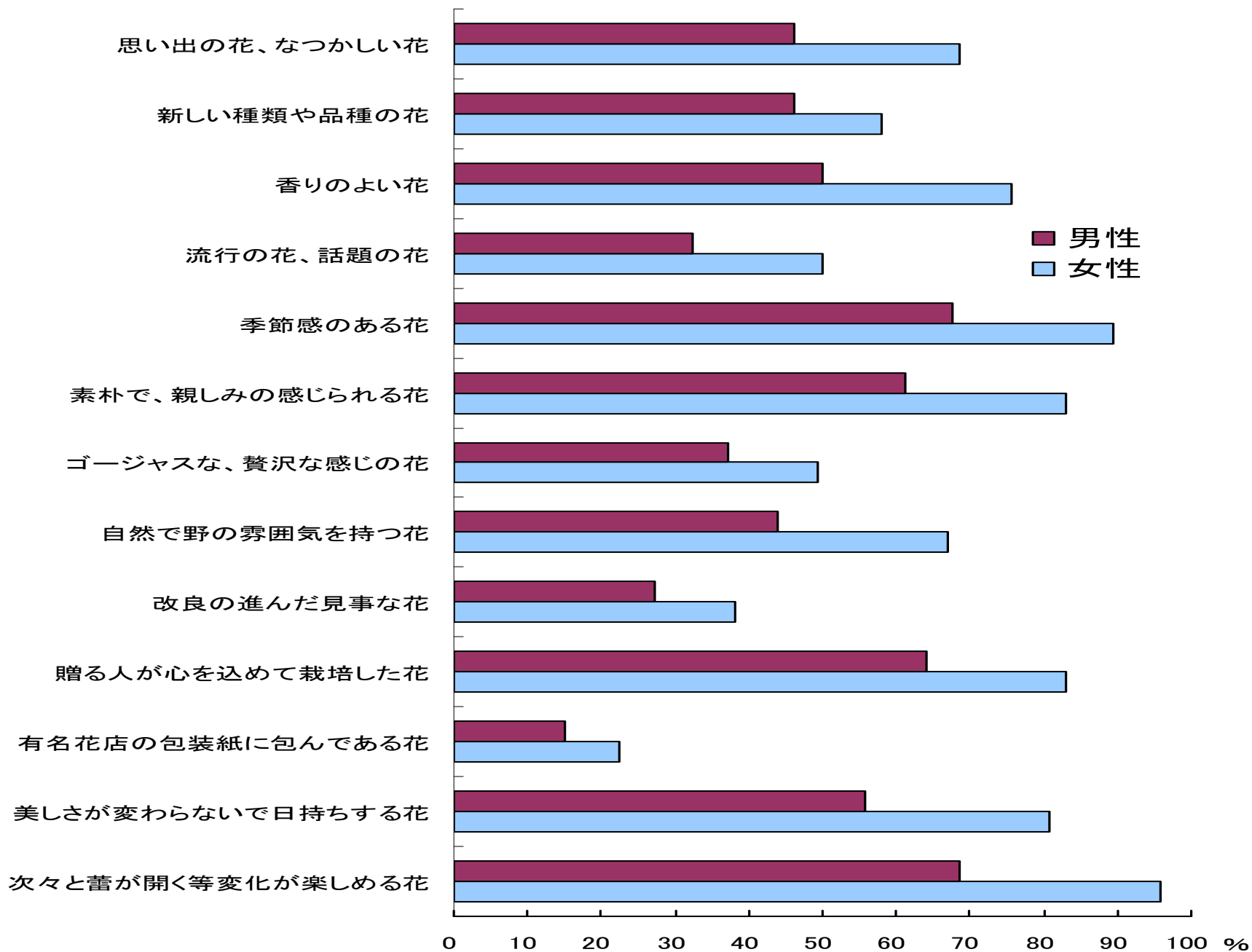


図 どんな花をプレゼントして欲しいか(男性と女性の比較)
「とてもうれしい」とうれしいの合計値を示す

花に対する見方の変化の背景にあると考えられるもの

自然観180度の変化

人間のための自然環境保護

→1970年代に変換

→人間が我慢をしても生態系の機能を維持

(人類が生き続けるために)

価値観180度の変化

開発、技術、工業→自然環境保護

量的なものを求める→質的なものを求める

物の豊かさ→心の豊かさ

実益→幸福感

金権支配→連帯意識、コミュニティ重視

(身近な人々との良好な関係)

この大きな変化の中で人々の花の見方も変化してとうぜん
→花育指導者はつねに社会の変化に関心を持つ必要あり

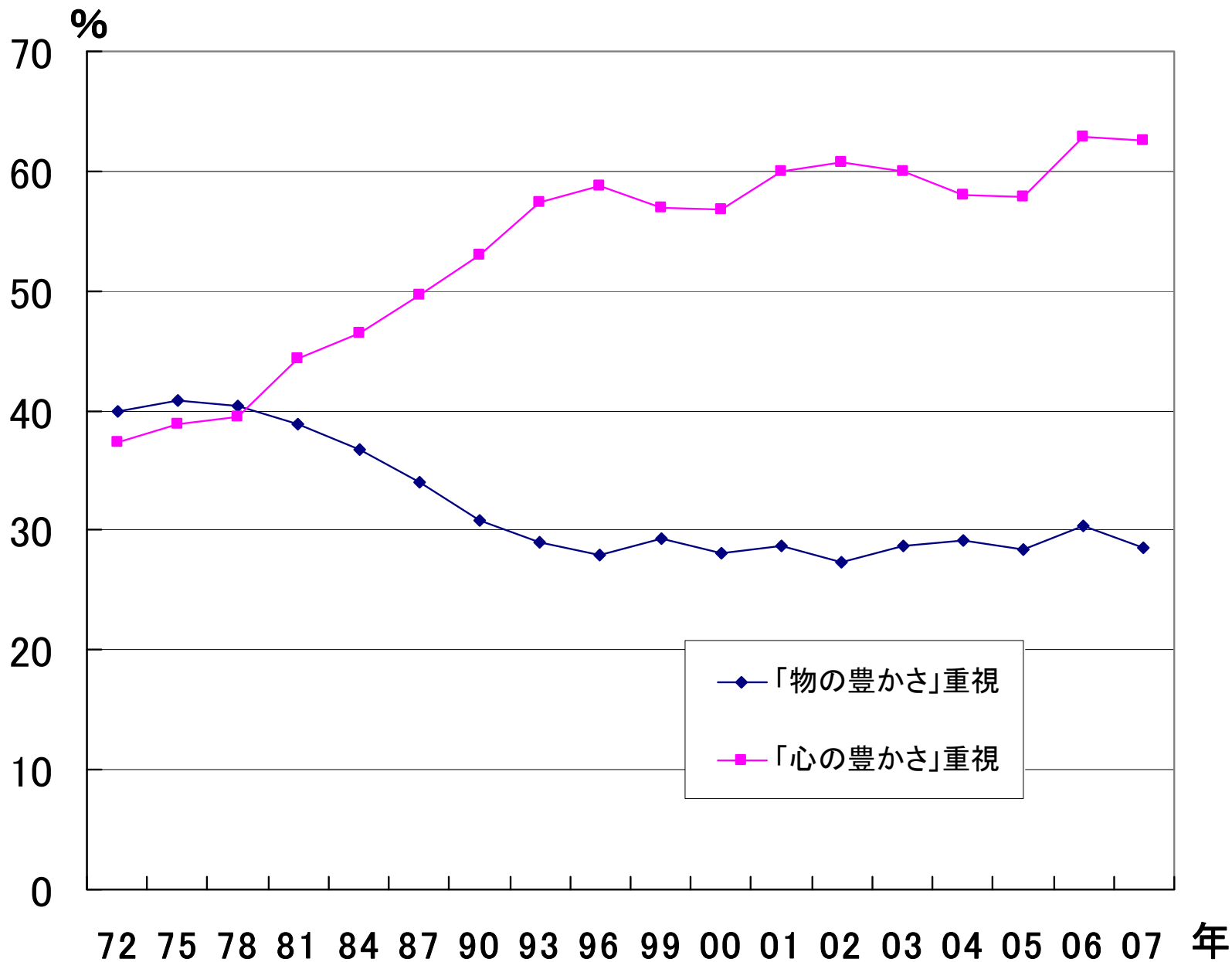


図 「物の豊かさ」、「心の豊かさ」を重視する人の割合推移（世論調査より）

前々画面の→左側を①過去・これまで
右側を②今後・未来 とすると

切り花、はなやかな花、高度に品種改良された花は
今人々の目には不自然、人工的、地球にやさしくないように
に見える？

雰囲気的に①過去・これまでを象徴？
これに対して

緑、野の花、自然の花は
実際に触れることが少なくても(少ないからこそ)高度情報化
時代では多くの人々が情報、映像等で自然の花の必死で
生命を謳歌する姿を知り、生産花卉と比較する機会が増え、
憧れ希求するようになる？

雰囲気的に②今後・未来の象徴？

花育を進めるにあたって不可欠であると思われる
2つのキーワード

地域性 と 多様性

現在自然科学、社会科学の両領域とも
地域性と多様性の語を外して物事は語れないといっても
よい状況になっている
これに時間軸を加える必要あり？

このような時代、社会背景の中では
これまでの花に対する感覚での花育は受け入れられにく
い場合もでてくる
ではどうすればよいのか
現在は非常に難しい社会環境にあるといえる

①地域性

地域(=コミュニティ)は人と自然から成り、ひとつひとつそれぞれに独自性がある
地域で行われる花育も同様

花育は**地域の人と自然を大切にする、好きになること**
からはじめよう

地域を重視する花育活動には

祭事、行事等にかかわる植物

原植生(またはそれに近い)、自生の花

和の花

を積極的にとり入れよう

→社会的に容認されやすい花育のかたちはここに

長く土地の暮らしと深く関わってきた

地域の原植生、自生の花の大切さ、価値（花育活動推進
方策に記載）をわかりやすく「本物の花」「本物の緑」などと言
い換えたりして子ども達に伝えよう

そのためには花育指導者の植生への知識、理解、納得の
徹底が不可欠

花育推進、継続、発展の原動力となる

「この地域だけの」「この地域ならではの」

「この地域らしさのある」

花緑とその楽しみ方、植え方、飾り方を取り入れる努力必要

→地域の活性化、観光資源としての利用につながる

* 人の側の都合ではなく、季節や植物の側の都合に合わせた花や緑の楽しみ方も伝えよう

* 自然の花・野の花と、生活の中で楽しむ花（生産花卉）
を分けてそれぞれの役割や大切さを伝えよう

原植生、自生種、古くからの帰化種などを取り入れる利点

- ①地域の自然環境に合い、手を掛けないでも元気に育つ
管理、施肥、病虫害予防等は大きく軽減→経費節減
- ②地域独自の景観を形成→観光資源に→ふるさとの風景
→なつかしさ、親しみやすさ、やすらぎ感を生む
- ③もっとも環境にやさしい花緑(生態系維持・回復に貢献)
- ④日本人本来の美意識に合う?
- ⑤地域特有の花緑への思い入れは他とは異なって深い
日本の恵まれた豊かな自然環境を最大限に活かそう
一部の欧米諸国のように、日本でもこの利点の周知、
理解が人々の間に広がれば花緑の楽しみ方、消費も
変わってくると思われ、環境へも良い影響が期待される
→供給側にとっては新しいビジネスチャンスへの可能性
新商品の提案・提供、栽培管理へのアドバイス等



ヤマユリ(特産種)



ササユリ(特産種)



オトメユリ(ヒメサユリ)特産種
福島～新潟～山形の丘陵～高山に自生



野生スカシユリ(特産種)



テッポウユリ(準特産種)



カノコユリ

特産種ではないが鹿児島県甕島の自生密度が世界でもっとも高い



タモトユリ(特産種) 鹿児島県口之島のみにも自生する美しく香り高い固有種、欧米の業者に球根が高値で買いあさられ、絶滅状態に、「幻しのユリ」ともいわれる

花育は地域、地域活動(住民、保護者参加を促す)と表裏一体となって進められるのが望ましい

地域性重視の姿勢は他の植物関連の教育活動との差別化にもなり、花育の価値を明確にすることにもつながる

いま人々(都市生活者、消費者、保護者、観光客)の関心は次の3つの語に集約されているようにみえる

自然	本物	希少		国産
(人工、合成)	(類似、偽物)	(大量、コピー)	← 反対語	国外産

有機自然農法、地産地消の野菜果物に関心集まる

花育もそれに沿うかたちに近づく？

これまでの花関連の普及や教育に成果があらわれにくかった理由は？ → 地域性への無関心も一因

都市生活者(消費者)のエコ意識は予想以上の高まりをみせていることを示唆するデータ

消費者からの意見・要望について

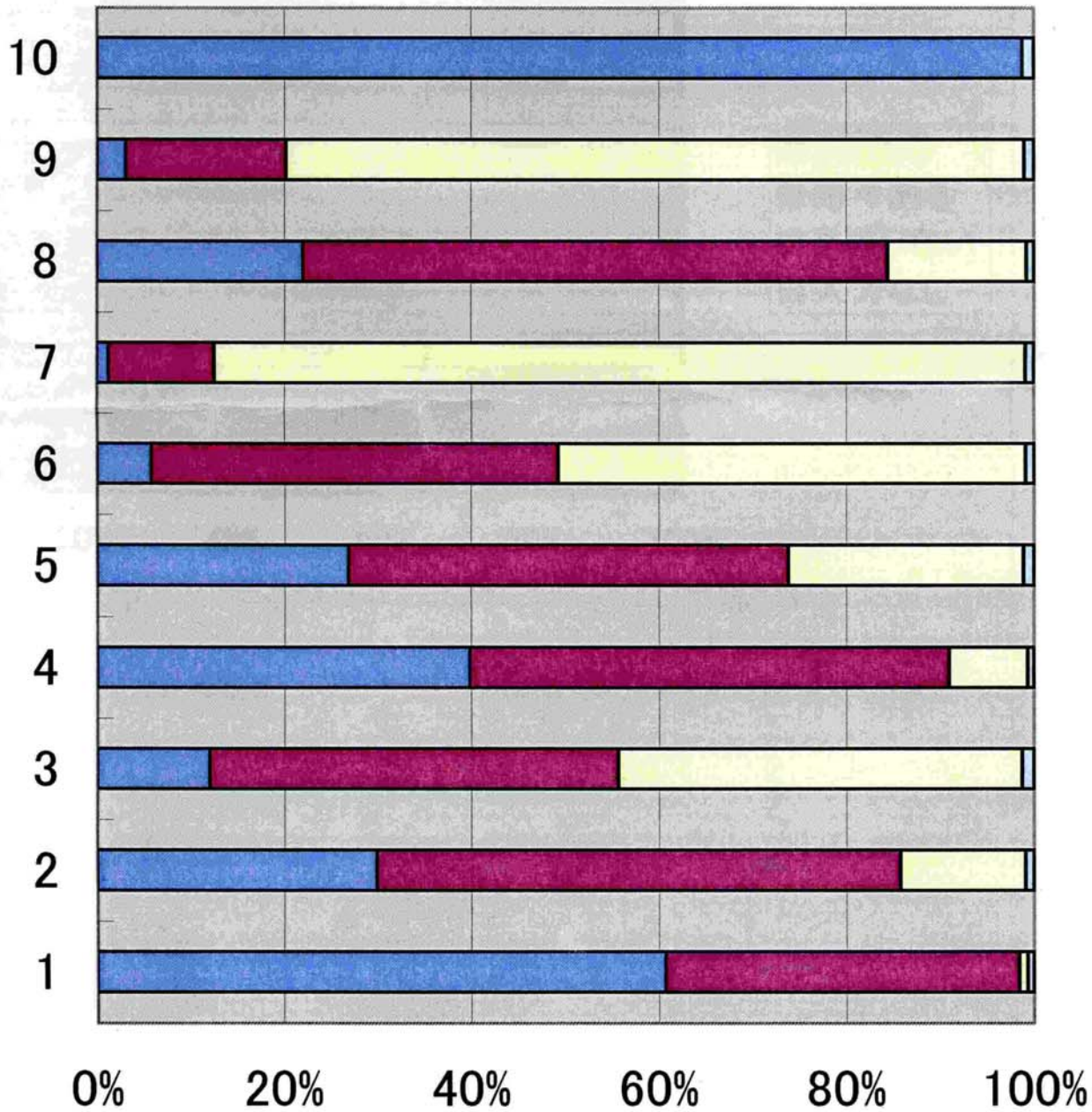
	よくある	時々ある	あまりない	入力なし
1. 色を指定される	538	334	8	6
2. 品目、品種を指定される	265	495	118	8
3. 商品を安くしてほしいと言われる	106	387	382	11
4. 日持ちする商品がほしいと言われる(品質管理が徹底され、開花日数等が一般的に長持ちする商	353	453	74	6
5. 鮮度の良い花が欲しいと言われる(彩花日から店頭陳列までの日数、時間が短い新鮮な商品)	238	416	222	10
6. 希少な商品(新商品等)が欲しいと言われる	51	386	441	8
7. 有名な商品(受賞商品等)が欲しいと言われる	11	100	767	8
8. 季節感のある商品が欲しいと言われる	195	553	131	7
9. 国産品が欲しいと言われる	27	152	698	9
10. 環境にやさしい商品(MPS-ABCやエコファーマー商品等)が欲しいと言われる	875	0	0	11

「平成21年度花き消費状況調査」より

調査方法: インターネット利用による入力方式

調査対象: 花キューピット協同組合関係者886名

調査期間: 2009年5月18日～6月19日



- よくある
- 時々ある
- あまりない
- 入力なし

②多様性

花育では生態系破壊などを回避する姿勢を明確にする
雑多にみえる日本の植生を快いと感じる感性を育む
例：使用材料は単一種利用より混種、混植等の方向へ

多様な動植物が棲み分け合う豊かな生態系に
やすらぎ感があるのはそれがめちゃくちゃな多様では
なく、長い年月を経て作り上げられた
支え合う多様であるから

- * グローバル化→生態系の破壊
価値観の均一化、画一化
→固有の生態系、伝統的生活文化の維持が危機に
→人類滅亡へ？

茶草場に育つ植物の例

ササユリ



一目でナビ

キキョウ



茶畑に敷く
ススキなどが育つ茶草場が
草原性の植物を育む



フデリンドウ

カワラナデシコ



茶草場

茶畑

周辺の採草地「茶草場」

茶畑が守る自然の宝庫

里山、茅場、茶草場は
人と自然が支え合う中で
多様性を保全してきた
(二次自然)



このようなシステムに類似
するものを

都市の生活空間にとりいれ
ることはできないか

'09.6.

朝日新聞

多様性とは？ 例えば・・・

多様

実生からの植物

ウメの開花

野生の麦

うなぎ、豆腐、ネギ

(地域的独自性)



やすらぎ感

均一、画一

株分け挿し木生長点培養

サクラ(ソメイヨシノ)の開花

栽培種の麦

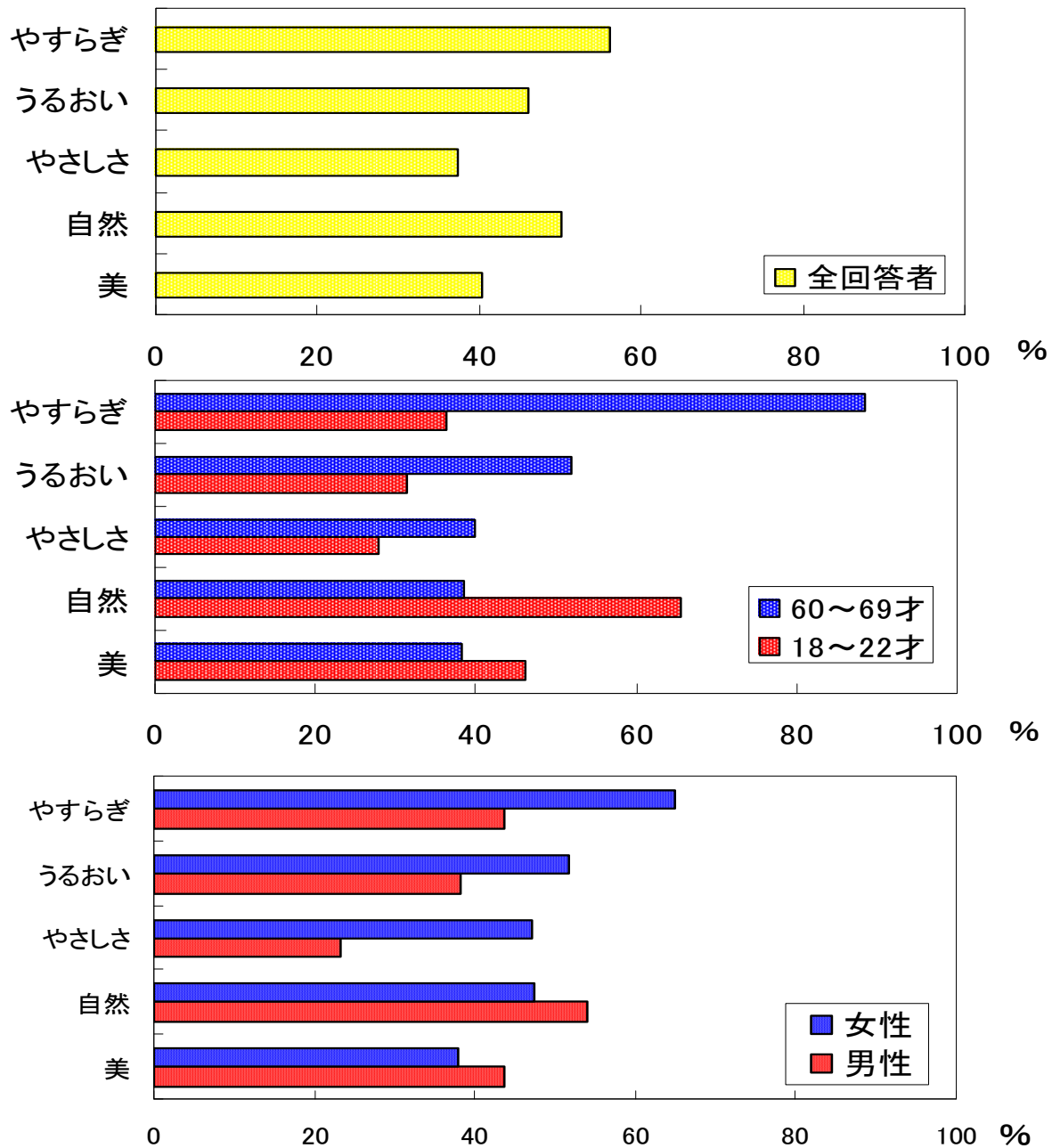
マクドナルド

(広域同一品質、価格)



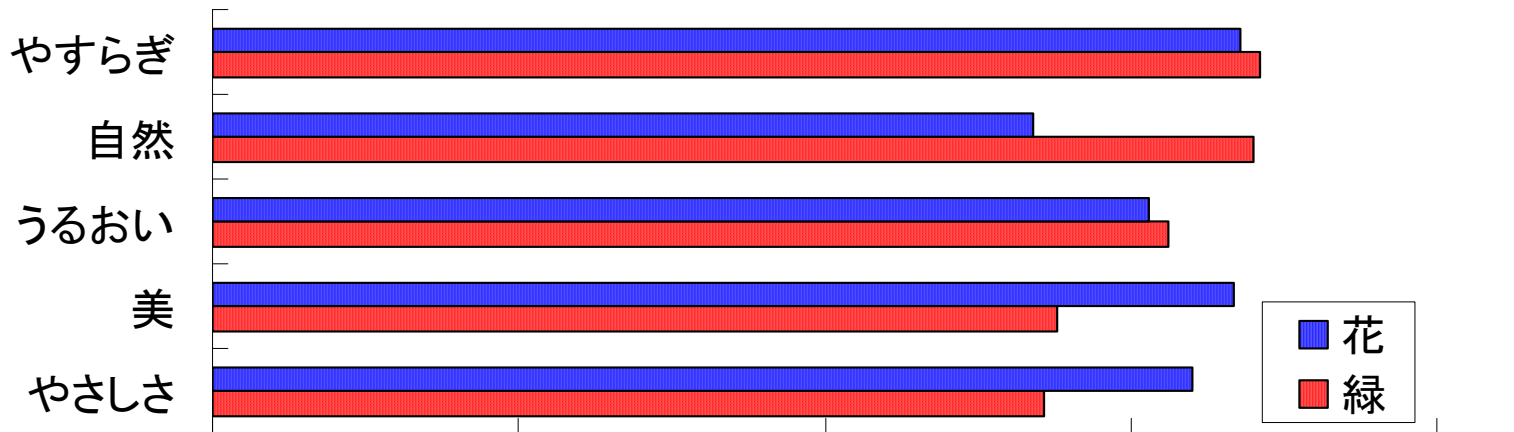
ストレス

飽きる等の不快感



図一 1 あなたにとって花とは（複数回答・14語から3語以内選択）

高年者



若年者

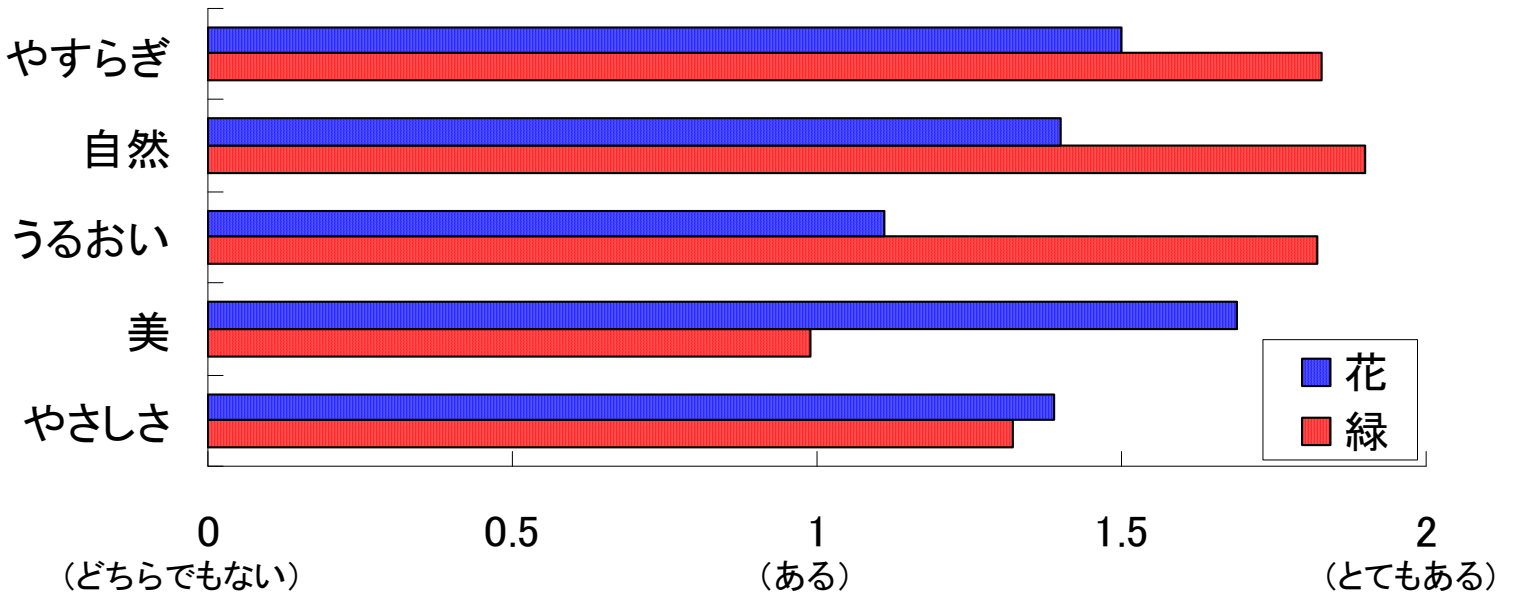


図-2 花と緑のイメージの強さの比較（高若年別・5段階尺度評定平均値）

実施：1997年

対象：589名（高年者454名，若年者135名）

2＝とてもある，1＝ある，0＝どちらでもない，-1＝あまりない，-2＝まったくない，の5段階尺度の評定平均値を示す

まとめー花育実施上の留意点ー

- ①植える、飾るなどの実習の前後のフォロー重要
- ②自然と人間の共生、自然破壊の回避・自然保全をつねに念頭におく
- ③現在の花育の内容は未完成である
花育に携わる方には時代に合う望ましいあり方を考え、作り上げようとする姿勢が求められている
- ④花育でもっとも重要なことの一つは
花を介した人とのふれあい、地域とのつながりを深めること
- ⑤実施法、実施対象により配慮事項が異なることがある
- ⑥地域性、多様性を考慮する